



1986年、東京交響楽団中国公演で團伊玖磨さん(右)と。

東京音楽学校出身の母は、僕が幼い頃、よくピアノを弾きながら日本の歌を歌っていました。美しい歌でした。その記憶が、今も身に染みんでいます。単なるノスタルジーではなく、音楽家であるからこそ、日本の抒情歌の美しさが身に染みるのです。

歌というものは、言葉の抑揚とリズムが旋律と密接に結びついています。明治時代に西洋音楽が日本に入ってきて以来、旋律と日本語をどうマッチさせるか、瀧廉太郎、山田耕筰、中山晋平

など、作曲家たちは常に苦心してきました。自分の作曲スタイルのなかで日本語の歌詞をきちんと伝えていこうという思いは、今でも続いていると思います。その反面、ポップスでは日本語の発音やイントネーションを無視して作られていることが多々あります。ポップスは言葉より音響を楽しむ要素が強いですから、それはそれでよろしいとも言えますが、でもやはり日本語の持つ表情や味わい、情緒を見直したいと思うのです。

オペラは時として日本語訳で上演しますが、そのときは日本語の標準語のアクセントに合うよう音楽と歌詞を研究して、日本語に訳します。つまり「橋」と歌うところを、音型のせいで「箸」にならないように、ということですが、でもどうしても日本語の抑揚と音型が合わないところも出てきます。以前に若杉弘さんがメノッティのオペラを日本語で上演したとき、日本語の関係で音型を変えさせてほしいとメノッ

ティに連絡したら「どうぞ変えてください」と快く返事をくれたそうです。それくらい言葉と音型はセットなんです。

旋律と言葉。各国の歌には、それぞれ固有の美しさがあります。ほかの国の言葉にはない、日本語ならではの美しさ——曖昧母音、鼻音や鼻濁音、「R」と「L」の中間の「らりるれる」のなめらかさなど——を大切にしていきたい。21世紀の今、改めて思うのです。

以前、團伊玖磨さんとも、音楽の日本語がだんだんおろそかになっている現状が残念だ、と話したことがあります。日本人の心を打つ響きを作曲するには、西洋音楽の手法をとことん突き詰めた上で、日本語の文化を大切に、美しく発音しなければダメだ、とも團さんは語っていました。そんな團さんが亡くなってから昨年で10年経ち、それをきっかけに仲間が集まりました。この秋の演奏会では、みなさんと日本語の美しさを共に感じたいと思っています。



©川村悦生

秋山和慶

1941年生まれ。64年2月に東京交響楽団を指揮してデビューのち音楽監督・常任指揮者を40年間務める。東京交響楽団桂冠指揮者、ミュンヘン交響楽団首席指揮者、ミュンヘン交響楽団首席アドバイザー。

ミュージアム川崎レクチャーコンサート

「日本歌曲はいま？」—團伊玖磨とその時代—

2012年11月23日(金・祝) 14:00開演

会場:ミュージアム川崎シンフォニーホール市民交流室

出演:辻井喬(詩人)、堀江真知子(ソプラノ)、馬原裕子(ソプラノ)、志田雄啓(テノール)、小林万里子(ピアノ)

【友の会料金】全席自由 2,700円

團伊玖磨 (1924~2001)

日本を代表する作曲家のひとり。「夕鶴」「ひかりごけ」などのオペラや、交響曲、管弦楽曲などで、日本やアジアを題材にした作品を多く作曲。そして「花の街」「ぞうさん」など歌曲や合唱曲で、日本語を大切に作品を作曲しました。エッセイ「パイプのけむり」などの文芸活動も知られています。